

カミュと日本古典詩における「現在」の意識

Le présent sur l'arête — conscience du présent chez Albert Camus et les poètes japonais du XIII^e siècle

若森栄樹

政治学者丸山真男は『日本の思想』や、『忠誠と反逆』に収められた論文「歴史意識の『古層』」で、日本人にとって時間は、『古事記』の時代からすでに「なりゆく」ものとしての「永遠の今」として捉えられていたと言っている。このような永遠の今（「中今」）において、人間はただ流れゆく時間、「なりゆくもの」としての時間、いわゆる「なりゆき」に身を任せるしかない日本人は考えてきた、と丸山真男は結論している。これはある意味で正しい。しかしそれとは違うもう一つの時間意識が日本の文学作品には現れているのではないだろうか。それは、フランス語で言えば *arête* の上で不安定に揺らぐ時間である。*Arête* というのはフランス語で「尖った縁を持つ刃、鋭く切れる〔様々な物の〕縁、細くて切れる糸、稜線」などの意味である。カミュは『シジフォスの神話』のコアと言える部分で、この *arête* という言葉を用いている。フッサール、キルケゴール、カント等に見られるように、哲学はカミュの言う意味での「不条理」、つまり理性の抱えるアポリア（解決不可能な難問）を「超越」「飛躍」「決断（規定）」の観念によって「解決」するのだが、カミュはあくまで「決断」せず、それに先立つ「微妙な瞬間」にとどまらなければならないと言う。このような瞬間、つまり「*présent sur l'arête*」にとどまることによって、言い換えれば「決断」しないことを「決断」することによって、文学は哲学とは異なる、全く新たなパースペクティブを得ることになる。「このとき現在という地獄は彼の王国となる」、「問題は何一つ解決されないのだが、すべての問題は輝かしい変貌を遂げる *aucun (problème) n'est résolu, mais tous sont transfigurés*」とカミュは書いている。こうしてカミュの言う「不条理」は、自殺を余儀なくさせる悲劇性を失うことはないままに、世界を輝かしく再生させる力となるのである。

このときカミュは、ある意味で「文学」の誕生に立ち合っていると言えるだろう。というのは同じ考えを私たちは彼の同時代人ジョルジュ・バタイユにも見いだすことが出来るし、更には歴史的、地理的にかげ離れた日本の古典詩人たち、たとえば13世紀の女流歌人藤原俊成女の作品にも見いだすことが出来るからである。*Arête* としての時間は文学、特にフィクション作品における根本的な時間である。今述べた藤原俊成女の歌には「現在時」のもとでは何も起こらず、すべてが現実とフィクションの間でたゆたう極めてマラルメ的なものがある。このようにフランス文学と日本文学の親和性を考えるとき、我々はいわゆる「中今」としての現在ではなく、*arête* としての現在をその共通項として捉えるべきなのではないだろうか。